

宇部市成長産業推進協議会 運営委員会 議事録

- 1 日時 令和5年2月21日(火) 13:30～15:30
- 2 場所 宇部市役所3階3-3会議室,防災情報センター
- 3 出席者(敬称略)

<運営委員>

	所属・役職	氏名	代理出席
商工団体	宇部商工会議所 会頭	杉下 秀幸	
企業	UBE株式会社 上席執行役員	三浦 英恒	宇部渉外部 部長 井原 毅
	セントラル硝子株式会社 執行役員 宇部工場長	毛利 勇	
	西日本電信電話株式会社 山口支店長	中川 健一	欠席
	株式会社ヤナギヤ 代表取締役社長	柳屋 芳雄	欠席
	ユーピーアール株式会社 代表取締役 社長執行役員	酒田 義矢	欠席
大学等	国立大学法人山口大学 大学院医学系研究科長・医学部長	篠田 晃	
	国立大学法人山口大学 大学院創成科学研究科長・工学部長	山田 陽一	
	国立大学法人山口大学 大学院技術経営研究科長	福代 和宏	欠席
	独立行政法人国立高等専門学校機構 宇部工業高等専門学校 校長	山川 昌男	
金融機関	株式会社山口銀行 執行役員 宇部支店長	中嶋 羊治	
	株式会社西京銀行 執行役員 宇部支店長	岡田 一夫	
	西中国信用金庫 宇部支店長	片岡 謙蔵	
支援機関	地方独立行政法人 山口県産業技術センター 理事長	川村 宗弘	副理事長 前田 秀治
	公益財団法人 やまぐち産業振興財団 副理事長	福田 浩治	
自治体	山口県商工労働部長	小関 浩幸	商工労働部 次長 鈴木 和則
	宇部市長	会長 篠崎 圭二	

<関係者>

山口大学医学部 血液脳神経関門先進病態創薬研究講座 研究代表 竹下 幸男
山口大学大学院医学系研究科 保健学専攻病態検査学講座 助教 富永 直臣
株式会社三菱総合研究所 主任研究員 佐々木 玄太

<事務局>

産業経済部 部長 濱田 修二、次長 佐々木 信
成長産業創出課 主幹 弘中 秀治、副課長 新原 英宜、係長 清永 浩幸、主任 奥嶋 貴子

4 内容

(1) 会長挨拶

(2) 成長産業の創出・育成に向けた取組報告

別紙、資料3により事務局（佐々木次長）が内容説明。

— 説明に対する質疑 —

(3) ときわ公園実証フィールド活用プロジェクトに関する報告

別紙、資料4により事務局（弘中主幹）が内容説明。

— 説明に対する質疑 —

(4) 成長産業に関する令和5年度の事業概要（案）について

別紙、資料5により事務局（佐々木次長）が内容説明。

— 説明に対する質疑 —

(5) 認定プロジェクト紹介

「脳創薬の game-changer となるヒト血液脳関門モデル kit の事業化
～ヒト血管モデルで病気を治せる世界を創造する～」

山口大学医学部 血液脳神経関門先進病態創薬研究講座 研究代表 竹下 幸男

(5) アドバイザリー機関による意見等

株式会社三菱総合研究所 主任研究員 佐々木 玄太氏による内容説明。

(6) 意見交換

【運営委員の主な発言概要】

- ・竹下先生のような事業を応援する意味でも、地元企業でファンドをつくる必要性も感じた。
- ・リチウム電池の技術は日本が先に作ったが、大量生産の段階で他国に負けた。新規技術をいかに育てられるかが日本の課題である。機運に関しても、裕福な日本では、そうした新しいものを生み出すといった取組がなかった。東工大、医科歯科大学の統合など、技術の垣根が無くなりつつある。これは、発展へのチャンスがあると思う。この取り組みは進めていかないといけない。
- ・カーボンニュートラルの影響で、逆風が吹いている分野もある。そうした中において、成長産業は伸ばしていく必要がある。一社だけでなく、本協議会のようなメンバーで、それぞれの強みを活かして、やっていきたい。また、一般市民に分かりやすい説明が必要とも思う。
- ・竹下先生の発表にあったような新しい技術を宇部市から発信できるのは大変素晴らしいことである。企業として、新しい技術を成果につなげていく責任があると強く感じている。宇部市での新たな産業の立ち上げに協力していきたい。

- ・立ち上げに伴う金融支援はもちろん必要だが、立ち上げ後の安定飛行に移るまでの販路拡大や販路確保が肝になる。新しい分野の事業については、行政がそのサービスを利用することで、信用力が増す。信用力があるとサービスを販売しやすくなる。ベンチャー企業は信用力に乏しい、金融機関のネットワークを活用して、そういったサービスを利用する相手を探すなどの販路拡大支援は必要だと考えている。
- ・竹下先生の話をきいて、若年性アルツハイマーの薬など、より効果的な薬の開発などにもつながっていくことが期待でき、大変よかった。ビジネスモデルも素晴らしいと思う。
- ・成長産業に関する若手研究者への補助金について、大変良い取り組みだと思う。
- ・大学の研究者の評価方法は、「論文の数、クオリティといったもの」、「社会実装化にどう結び付くか」、そして、「外部資金の獲得」の3つの要素がある。独創的なアイデアがあったとしても、それを伸ばす空間がしぼられてしまっている印象がある。大学としては、目利き、評価をきちんとすることが大事である。
- ・竹下先生のシーズが、産学官の連携で大きく羽ばたくことが期待している。医工連携は、山口大学が率先して始めた取り組みである。大学は、現在、文部科学省からデジタル人材の育成を強化するよう言われている。宇部高専、工学部、宇部市で、協力してデジタル人材の育成に力を注ぎたい。
- ・宇部市の補助制度は、充実した補助制度だと思う。重要となるのは、選定の将来性をどうやって見込むか、そして、選定方法の透明性の確保である。こういった思い切った政策も大事である。
- ・山口県産業技術センターの立ち位置としては、産業界、行政、大学の中間的な立ち位置にいる。技術を解釈したうえで行政に届けることができる。この度の発表を聞いて、当センターも一緒になって、プロジェクトにかかわる職員も2人3脚で関わっていきたい。
- ・スタートアップは、医療、工学といった技術シーズがないと大きく発展させるのが難しい。宇部市には、医学部、工学部、宇部高専といった技術シーズがあり、それに対し、基礎自治体がしっかりと力を入れていくといった特色ある施策となっている。
- ・宇部市においては、県ともしっかり連携して取り組んでもらっており、研究開発補助金に関しても施策効果が高まっている。
- ・宇部市の来年度の事業案の提示があったが、宇部市の意気込みを感じている。環境・エネルギー、バイオ、スタートアップなど、県としても、しっかりと取り組んでいきたい。協議会とも連携しながら、取り組んでいきたい。

(5) まとめ（会長）

協議会が立ち上がって、この春でちょうど2年になる。産業をしっかり伸ばして、仕事を作らないと、人口減少の問題にあたれないと考えており、この取り組みを始めた。やっと目に見える形が見えてきた。今年度のNSI社、この度の竹下先生のプロジェクトである。また、これに続くプロジェクトも出てきている。当初は、本当にシーズが出てくるか心配だった。たとえ、出てきたとしてもプロジェクト化につながるのか、という思いもあった。そして、出てきたビジネスモデルが地元企業とつながらなければ、本当の意味がないと考えていた。

研究機関からシーズの情報の提供があり、アドバイザー機関からアドバイスをもらい、そして、

地元企業との連携も始まっている。今後は、金融的な支援も必要となり、協議会に金融機関にも入ってもらっている。全体をバックアップしてもらえるのが、山口県をはじめとした行政機関と考えている。当初、4年間をかけて芽吹くかな、といった思いだった。こんなにスピーディに芽吹いてきたのは、ここにいる協議会のメンバーのおかげである。

本日は、課題もいただいた。今後伸ばしていくにはどうするのかといったファンドなどの金融支援の問題、市民の理解を深めていくにはどうするか、より地元企業に様々なプロジェクトに関わってもらうにはどうするのか。大学や高専から持続的にシーズが出てくるための環境づくりも必要である。

これからは、コロナ後への転換期を迎え、リアルな意見交換もしやすくなる。意見交換できる場も必要と思う。市民への機運醸成も大事であると感じた。

最後になるが、本日のご説明した取り組みの方向性で進めていくことに対し、ご了解をいただいてよろしいか。

→ 異議なし

【配付資料】

- ・ 運営委員会委員名簿 資料 1
- ・ 配席図 資料 2
- ・ 成長産業の創出・育成に向けた取組報告 資料 3
- ・ ときわ公園実証フィールド活用プロジェクトに関する報告 資料 4
- ・ 成長産業に関する令和5年度の事業概要（案）について 資料 5